
修羅の一族・咎人語り

織田亜由実

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

修羅の一族・咎人語り

【Nコード】

N7841Y

【作者名】

織田亜由実

【あらすじ】

一介の農民の身分である少年、雁真は妹、菊と共に貧しいながらも幸せな生活を営んでいたが……

雁真編 巻 序章（前書き）

いつか改訂予定です。

雁真編 巻 序章

暮れの赤を薄く引き伸ばしたような空に、鰯の群れたような陰影のない雲片の雄大な様を見上げて、彼は音もなく笑った。

「今年も、飢饉から逃れられたな」

その黒髪は涼やかな風にそよがれ、彼はどこか愁いにも似た思いに浸っていた。決して端麗な容貌とは言えないが、面立ちの穏やかで人好きしそうな姿をした少年だった。年の頃は十四、五だ。

「本当に安心した。今年も旱魃が訪れなくて良かったね、お兄ちゃん」

冷たい土を鳴らす音と共に、一人の小柄な少女が歩み寄ってきて彼の隣に並んだ。肩の上で切り揃えられた黒髪が、彼同様に僅かに揺れている。彼の妹の、菊と言う。未だ十二のあどけない少女だった。

そう、この土地は長い間干害に悩まされていた。今より六年前の旱魃の年、この娘の両親は饑餓により帰らぬ人となったのだ。それを憐れんだこの少年の親切によつて、当時寄る辺の無かった菊は引き取られたのだ。つまり、正しくは“義妹”である。

彼は妹の頭の上に手を乗せると、慈しむように撫でてやった。

「うん、良かったな。祈りが仏様にきちんと届いてる証だ」

「来年も、その次の年も祈り続けようね」

菊はこれ以上にはいと言ったような満面の笑みで彼の着物を掴み、

甘えるように擦り寄ってきた。十二にもなつてこの調子で懐いてくるのだから、彼としては将来無事に自立できるかどうかで気苦労が絶えなかった。その都度自分は親身だな、と思いながら苦笑した。

「それまでに生きていられたらね」

「やだ、そんな不吉な言い方」

菊は厭そうに頬を膨らました。彼はそんな妹の幼い面を見て、可笑しげに笑った。

「御免な。でも兄ちゃんはな、すぐにでも菊に一人前になって欲しいんだな」

菊は小首を傾げた。

「どうして？」

妹からの突然の疑問に、彼は一瞬迷う。

「どうしてって……まあ、自分の面倒は自分で見ないと。兄ちゃんの身に何時、何が起こるか分からないんだから」

「またそんな事言つて。悲觀的なんだから」

菊の仏頂面を見て、彼はまた自分の悪い癖が出たな、と他人事のように思った。殊自分の身に関しては、妹の将来が絡んでくることもあつてどうも案じずにはいらなかった。

「俺、悪い事したみたいだな」

菊に控えめにそう言うつと、

「そうでしょ。毎度そうやって私を不安にさせて、私は絶対にお兄ちゃんから離れないからね」

語気強く、菊はぐつと彼の腕を抱き締めてきた。言葉通り、離すまいと。いじらしい娘だと、自然と彼の口から笑みが零れた。そして次の瞬間、彼からはふとある悪戯心が湧き、一つ声を上げていた。

「あつ、菊が余りに強く締めつけてくるものだから腕が潰されそうだ！　これだけ遅しければ一人でも生きていけるな」

「えっ？　……もうっ、驚かさないでよっ。潰れるわけないじゃない」

菊は一瞬跳び上がって腕から飛び退くも、案外直ぐに気づかれた。彼女の顔は不機嫌一色だ。

「あれれ？　真に受けないのか……」

彼は呆然とした。これは冗談でも悪戯でもなく、半分本気だった。少しくらいの効果で菊をその気に傾けられるものだと。

「お馬鹿さんね。私、もう十二だよ。そんな悪戯もう弁えてるわよ」

「つまらないなあ。もうそんなものか……」

そう、菊はもう十二だ。あの頃の、六つの娘ではないのだ。彼此……そう、既に彼此六年もの歳月が過ぎていたのだ。

彼の目は六年間もの記憶の流れを瞬時にして辿り、年に似合わず早くも追懐していた。

「苦悩はあつたけど、案外早いものだ。この調子で、菊もあつという間に何処かに輿入れするんだろつな」

「やだ、やめてよっ」

その時、如何にも悲鳴じみた声を上げ、菊がぱつと抱き着いてきた。彼は傾いて転びそうになるのを何とか踏み堪える。丁度彼女の頭が、彼の顎の下にきた。その体は怯えるように、微かに震えていた。

「私、知らない男の人になんか嫁入りできないわ。だって、お兄ちゃん以外の人は信用できないもの……」

不安と哀しみに打ち沈んだ、幼い少女の声。

彼は困ったような顔で菊の頭を撫でてやった。彼のみならず、彼女にも悪い癖はあるのだ。それが人間の性なのだろう。

「菊……甘えちゃ駄目だ。女の方は配偶者がいないと、とても生きていけないよ」

「私にはお兄ちゃんがいるものっ」

菊は益々抱き着く手に力を込めてくる。彼女の涙ぐんだ声に、彼はこのままではいけないと思った。

「き、菊。分かったよ。一旦落ち着こうか」

彼は妹の肩の上に手を置き、そつと体を離れた。菊は暗く沈んでいた顔を上げ、瞳を潤ませた。彼はそれを見て、僅かに罪悪感を抱

いた。

彼は一度だけ息を吐くと、腰を少しだけ屈ませて菊と視線を合わせた。

「お兄ちゃん……」

菊の不安に歪んだ顔を見て、彼はやれやれと苦笑した。もう十二歳と表現しても、やはり未だに十二歳である。

「兄ちゃんの事、好きか？」

彼がそう確認すれば、菊は幼子のようにこくりと頷いた。彼も内心でよし、と頷いた。

「お前は兄ちゃんに迷惑かけても良いと思うか？」

引き続き確認を取れば、菊は今度は首を横にぶんぶん振って強く否定した。彼の中では申し分ない反応だった。

「だったらな、兄ちゃんの言う事はできるだけ聞いてくれないか？
勿論お前との二人暮らしは、俺にとっては神様が与えて下さった
尊く幸福なものだよ。でも結婚する事もまた、尊くて幸福なものな
んだよ」

「う、うん」

相変わらず菊の表情は暗いが、一生懸命に耳を傾ける分には救い
ようがある。彼はそれを確認した上で、優しく微笑んだ。

「菊は賢い子だ。甘え癖は中々考え物だけど、人を信じる事は大切
だぞ」

「う、うん。お兄ちゃん」

菊には徐々に、明るい笑顔が取り戻されてきた。彼はほっと胸を撫で下ろし、彼女の頭を撫でてやった。

「でもお兄ちゃん。今は私、お兄ちゃんと一緒にいて良いでしょ？」

「そりゃそうさ。こんな甘えん坊、今はとても手放せないからな」

「ふふつ。お兄ちゃん大好きっ」

菊の顔には、溢れんばかりの幸福が満ちた。

さわさわと揺れる芒の茂みの中、二人の兄弟の仲睦まじく寄り添う影があつた。

雁真は、鄙^{ひな}びた小さな村で妹と二人暮らししていた。

彼等の村では現在水稲耕作を営んで収入を得ているが、雁真達兄弟にはどうもそれだけでは家計が心許ない為、雁真がたまに町の方へと稼ぎに向かつていた。

雁真は余暇などにはよく村の外れの木立の下で書物を読んだ。これは町にある貸本屋から借りてきたもので、雁真は低い身分の者にも拘わらず文字を読み、読解する能力に長けた稀少な人物でもあつた。ただし彼が新たな本を持ち帰る度に決まって妹は顔を顰め、勿体ないなどと咎めてくるのだ。

家で休むにしても妹の視線で落ち着かない。それ故にこうして人気がない場所に行き着き、ゆったりと寛げているのだ。

収入の関係で本は然程多く借りられない。彼は一冊一冊をじっくりと丁寧に脳に暗記していった。そして妹に御伽話を聞かせてやれば、これが顰めっ面を作る割には好評だった。毎夜のように話をせがまれては、快諾したり疲労がって渋ったりだ。

そして丁度今、

「お兄ちゃん。また月に帰ったお姫様のお話を聞かせてよ」

妹の菊は粗末で薄っぺらな掛け布団に体を包んだ恰好で、寝床に横たわっていた雁真の傍らに極当たり前のように体を横たえた。

二つの枕の狭間で暗い夜の室内にゆらゆらと揺れ動くのは、油の差された唯一の灯火ともしびである。

「今日は無理。兄ちゃん、疲れてるんだよ」

「疲れてるようには見えないよ？」

菊の顔には不満の色。

無理もない。雁真は今日、実際には然程疲れを溜めていなかった。それでも、彼とて必ずしもそのような気分になれるわけではなく、今宵はとっとと静かに寝てしまいたい気分だった。

「文句は言わない。自分とこ戻れ、火消すぞ」

雁真が促すと、菊はその場から離れる事無くにこりと笑った。

「一緒に寝ていいでしょう？」

「また？」

菊はうん、と可愛げに頷いてみせた。

雁真は常の事ながら半ば呆れ、半ば受け入れ態勢だった。とはい、成るべく離して寝かせてはいるが、強いてという程でもない。流石に疲れた時などは一人で眠るのだが。

菊はもう十四。家族とは言え嫁入り前の妹と寝るのは何とも気が引けるものだが、菊にいたっては諦念すらあった。

雁真は頬杖をついた恰好で、息を吐く。

「はあ。夫婦でもこんなに近くないぞ」

雁真は既に彼の両親で見知っていたのだ。つかず離れずが丁度良いと。

だが菊はそんな思いにも構わずに、雁真の胸に顔を当ててきた。

「その人達は情が冷めているんだわ」

「こら、そんな事言うんじゃない」

自分の両親を貶されたような苦い心地で雁真は菊を叱るが、彼女は微かに眉を寄せるのみだ。口喧しく咎めようにも妹可愛さに絆されてかどうも躊躇われ、彼はこれ以上きつく言う事はできなかった。

「近づき過ぎる事の何がいけないの？ 私達は相思相愛なんだから」

そう冗談めかして言って、菊は雁真の体に腕を絡めてきた。これ以上の馴れ合いはいけなと思ったが、今の雁真にはこの腕を除けるのが億劫だった。

「親しき中に垣をせよ、と言うだろう？ 親しみも深過ぎれば、逆に不幸を招く事になるんだ。だから家族なんかでも、一定の距離を以って接する形が理想とされているんだよ」

雁真がそう教え諭せば、

「お兄ちゃんたら。そんなの、ただの言葉じゃない。人を深く愛する事はとても純粋で、素晴らしい事よ。丸でそれを否定されてるよ、うで、私、嫌いだよ」

菊が一層深く雁真の胸に擦り寄ってきて、彼は内心で恋人のような距離だな、などと複雑な気持ちになる。

決して言葉は軽いものではない。言葉にこそ重い意味が込められている事を、この娘は無知故に知らない。その事もどうにかして諭したかったが、やはり胸の内に押し止める。

得手勝手とまではいかないが、どうも菊は我が儘な性格である。

とても今の状態では自立できたものではないし、今暫くは雁真の保護が必要だ。彼としては憂慮せずとも年月を経ていくにつれ、娘が自然しおらしくなるのを直願うばかりだ。

「お兄ちゃん、温かい」

菊は甘え声で笑みを浮かべ、微睡みながら瞼を閉じる。先程まで読み聞かせをせがんできた事の嘘のような速さ。

「仕方ないかあ……」

雁真はそう呟く。実際は仕方なくもないが、雁真自身がこのまま安眠したかった。

ただ、いよいよこれも考え物ではある。

「……………お休み」

一先ず今夜は見逃す形を取り、雁真は妹に就寝の挨拶をすると、彼女の体をのそのそと越えて灯台の火をふっと消した。

夜四つ半時の出来事である。

「ふう……………」

手を休め、疲労に溜息を吐いた。玉のような汗の浮いた額を腕で拭えば、土混じりの水が僅かに擦りつく。体は容赦ない重労働にすっかり草臥れ、節々が痛む。

昼間の水田にて、雁真は雑草抜きをしていた。稗は少し目を離している隙に直ぐに伸びてくる。稲の養分を吸われては堪ったものではなかった。

「おっい、雁真あ」

自分と呼ぶ声に彼が顔を上げれば、年配の農作仲間の男が向こう側の道で手を振っていた。

「飯にしよう」

その言葉を聞き、雁真はようやく飯にありつけるのか、と自然笑みを零した。腹の音は随分前から鳴りつ放しだ。

雁真は水田から裸足を出し、脱ぎ置いておいた草鞋を履いて男の元に急がず焦らず向かった。斜面を、肩を左右に大きく揺らしなが

ら上がり、男の前に立つ。

「ははっ、鼻っ面が汚れてんぞおめえ」

男は白米の握り飯の乗った竹皮をこちらに渡しながら、からからと笑う。雁真はそれを受け取りながら一瞬何の事やら目を丸くし、臆て自分の鼻についた見えざる汚れを袖で拭い取りに掛かった。さぞ不恰好に見えたであろう。

「色男が台無しだわな」

「そんな、大したもんじゃないですよ」

雁真は愛想笑いで返す。決して謙遜などではなく、迷惑とすら言えた。

年寄りというものは、若者ならば矢鱈にこうした同じような評価をしてくる。年寄り連中に混じって労働する数少ない若僧の雁真など尚更だ。これはある意味、若者に対する皮肉とも言える。

町で見掛ける芸者は美形揃いで、住人達も町という格が相俟って見渡す限りが華やかで優美である。それに引き換え、雁真は体から土の臭うような田舎者で、恰好は地味で薄汚れており、見るからに垢抜けない。これを色男などと言われれば、町中にはどつと笑いの大波が押し寄せる事だろう。

雁真は丸い握り飯を手に取り、一口齧った。そしてもぐもぐと有り難く玩味する。

「ほれ、水だ」

男が頃合いを見て水筒を差し出し、雁真はそれでごくりと咽を潤

した。

「はあ。これで昼も何とか一踏ん張りできそうです」

「おう。若い内はしっかり働きな」

男は気さくに笑い、自分の分の飯を持って去っていった。

雁真は田に続く斜面に腰を下ろし、地面に竹皮を置くと、一人黙々と食事を再開した。

彼の眼前には、背が高くなりもうじき収穫期を迎えようとする稲が広がっている。この共同水田は雁真含める村の農民達が手塩に掛けて育ててきた賜物となる。

今年も難無く実りそうだと彼は満足げに笑んだ。

その時、雁真はふとある花に吸い寄せられた。水田の付近に咲き連なった、赤き彼岸の花に。妹の菊が“地獄花”だと言って忌み嫌う。だが、妹には内緒ではあるが、雁真はあの花にどこか妖しげな美しさを感じていた。しかし何にせよ、あれも直に収穫せねばなるまい、と彼は割り切った。

「お兄ちゃん」

「ん？」

「私、お兄ちゃんのお嫁さんになりたいなあ……」

雁真が菊と二人で帰路についていた時の、彼女の口から発せられた何気ない言葉だった。丸で満更でもないように、夢見る娘の顔に

なっている妹を見て、彼はぎよつとした。そして一瞬真に受けてしまった自分自身に呆れ果て、自嘲の笑みを浮かべた。

「魂消た。菊が突然変な事言い出すから、兄ちゃん心の臓が止まるかと思つたぞ」

本当に、心臓に悪い。今だに音はときどきと落ち着きが無かった。

すると、そんな兄の態度に菊は不満げな顔で、

「お兄ちゃんたら、柔なのね」

それを聞き、雁真はむっとなる。これはいくらお人好しと言われる彼とて、聞き捨てならぬ言葉だった。

「菊、言葉にも限度つてもんがあるぞ。目上に向かつて柔とは何だよ」

「だって、言葉の一つで心の臓が止まる程度なら、命が幾つあつても足りないじゃない」

昔から兄の言う事には忠実だった筈の菊が、今では妙にも反発の色が強い。否、これは丁度拗ねている子供のようにも見えなくはない。どっちにしる厄介ではあるが。

「あのなあ、何をそんなに向きになつてゐるのさ」

「違ふものっ」

菊は不機嫌面で、雁真からぶいと顔を背けた。嫌われてしまったな、と雁真は密かに苦笑した。

「違うもの……」

菊が力無く呟くように言ったその言葉を、雁真は聞き落とした。

「菊？」

急に大人しくなった菊の様子を不審に思い、雁真は訝しげに妹を覗き込もうとする。彼から背けられ、見えない顔を。

まさか、落ち込んでいるのだろうか。こう見えて、繊細な面を持つ娘だ。

その時、菊が出し抜けに顔を向けてきた為、雁真の心臓が再び大きく跳ねた。寿命が幾らか縮められたような気分だ。

そして雁真は目を丸くし、呆然とする。菊の顔は意外にも笑っていた。したり顔と言う奴だろう。

「なんてね。私、お兄ちゃんには嫌われたくないもの」

それを聞き、雁真はほっと胸を撫で下ろす。

「俺だつてそうだ。曲がりなりにも愛情込めて育ててきた妹なんだから、俺も尊敬される兄ちゃんではないとな」

「うん」

菊は優しく、にこりと笑った。この時、彼女に初めて年相応の少女の姿を見たような気がし、雁真の胸の中はじわりと温かくなる。彼女も確実に、成長しているのだと。ここまで苦労して育てた甲斐があったという、充足感もまたある。

「私、今の暮らしが幸せなんだよ」

菊は雁真の腕に手を絡め、肩に頭を預けてきた。妹の小さな体からは体温が伝わり、冷涼な空気の中では心地好い。

「夫婦って、こんな感じなのかしら」

「さあ、どうだろう」

雁真はそれをさらりと躲した。

だが、内心ではそれは少し違う、と確信していた。夫婦であれば、否でも応でも幾分か情が冷めるものだろうから。

雁真編 式序章（二）（前書き）

二話目。

雁真編 貳 序章（二）

農民の仕事は夜明けから始まる。

雁真は明け六つ時の鐘を撞く音で妹と二人で起床し、朝餉を採つてから未だ薄暗い仕事場に出た。

空は白み、空気は沈んだように閑散としている。二人は未だ静かなる眠りに落ちている田を横手に、田圃道を歩いていった。他の住人達もそろそろと田に広がってゆき、徐々にその数を増やしていった。全員が夜明け特有の沈んだ空気に馴染み、溶け込んでいる。

「はあ。お兄ちゃん、今日も大して食事採らなかったね」

菊は眠たげに、呟くようにそう訊ねてきた。寝起きのせいか、その声は昼とは違って小さく、掠れている。

「そうか？ ……寝不足だからじゃないかな」

一方の雁真は眠たげと言うよりも、竄れているようだった。瞼は未だ完全に開き切っていない。

「寝不足って、お兄ちゃん夜更かししたの？」

「まあね。お蔭様で」

雁真は意識的に妹からやや顔を背け、昨夜の出来事を思い出して苦笑いを浮かべる。菊は首を傾げるが、彼の寝不足の原因が彼女自身である事にやはり気づいていない様子だ。

菊は一見可愛い娘だが、その実寝相が悪い。その都度雁真は被害に遭っており、酷い時は顔を蹴られていた事もある。

ただこの事実を本人に明かすのも酷な気がして、菊が雁真の事を好いているのが目に見えているだけに、その分彼女の受ける衝撃の大きさも容易く想像につく。だから菊には一応言わないでおくと決めていた。

「変なの」

そんな雁真の考えている事など知る由もない菊は、彼に疑るような視線を向けてくるのみだ。だが直ぐに興味をなくし、

「今日もお仕事が無事終えられますように」

いつものように目を瞑り、手を合わせると、天に祈った。

「菊に縁組、ですか」

雁真が半ば呆然としてそう聞き返せば、向かいにいる、作業用の鎌を片手に持った中年の男が頷く。その日の作業の休憩中に、仲間の男が突然持ち出してきた話だった。

「嫁入り先に、不都合はないだろう」

「ええ、勿体ないぐらいです」

この突然の知らせを聞いた時は一瞬耳を疑い、真まことなのかと驚いたが、このような重大な折目の含まれた話題に偽りの気持ちなどある筈がない。

素直に嬉しくなり、驚きに強張っていた雁真の顔には次第に喜色

が滲み出た。

「でもどうして名主^{なぬし}さんの息子さんが」

「菊は村一番の美人だからな」

「はあ、菊が」

雁真は、あの十四歳の我が妹が……と心の中で気が抜けたように続ける。確かに愛らしい娘ではあるが、美人とまでゆくと過大評価になるのではあるまいか。何せ彼には、記憶にある美しい町娘の艶やかな姿が未だに離し難い程に鮮明である。

「お前に似ずにな」

男は冗談めかして笑い、雁真も一先ず苦笑で返した。無理もない、元より血の繋がらぬ兄妹だ。菊が多少美人であろうと、彼のものは結局は素朴な農夫面である。

否、こう思うだけ無意味な事だろうからここでよしておこう。

「妹に伝えておきます」

兄の務めとして、当人にこの吉報を知らせよう。今日の仕事が終わりに、家に帰り着く頃にでも。きっと、非常に喜ばしい一日を終えられる事となるだろう。雁真は思わず、にんまりと笑った。

「でもいいのか」

「はい？」

男の顔は、必ずしも快く祝福できないと言ったような雰囲気だった。

「あれだけ仲がいいと村では評判の兄妹だ。お前の唯一無二の家族と別れる事になるんだぞ」

男の当然と言えるその言葉に、雁真は目を丸くして暫し無言となる。確かに菊の結婚は、自然のままに雁真との別れを意味しているが。

「何も……別の土地に移るわけではないし、菊が望めば夜以外、何時でも会えますよ」

衣食住は共にできなくとも、この狭い村の中では何時でも出会える筈だ。だが流石に仕事の最中に顔を出されるのは控えて欲しい、と雁真は内心で付け加える。

すると、男は感心したように何度か頷いた。

「へえ、お前も一人で生きてけるって事だ」

男は、褒めているのだろう。雁真が妹無しでも辛うじて立派に生活できるのだと。確かにそれも正しくはあるが、もっと別の理由に因^よるところもある。

「或いは、一人の方がよっぽど楽でしょうね」

雁真の声音は、不思議と淡々としていた。彼はどこか覚束ない瞳を僅かに伏せ、溜息を吐きたくなる衝動を噛み締めて、堪えた。

「あの娘は、近過ぎるんです。だからこうして一気に突き放してや

った方が、却って幸せなような気がするんですよ」

雁真は彼に似合わず、家庭での感情を他人の前で吐露していた。丸でこれは、否、これこそが神様の巡り合わせなのだろう、と雁真は信じて疑わなかった。

菊は清涼の秋気漂う空を仰ぎ、昼中の雲の平穩に流れる様を澄んだ瞳で眺めていた。

「過ぎるなあ」

「ん？」

隣でそう呟いた妹の声に反応してちらと横に目を遣れば、襷で袂をたくし上げた恰好をした菊が、ぼんやりとした顔で雲を目で追っている。それに釣られて雁真も上空を見遣るが、何ら変哲のない晴天の風景に当然の如く興味を無くし、再び菊の顔を見た。すると、丁度彼女と視線が重なった。

先程、雁真が草の斜面に腰を下ろして田の景色を眺めているところに、菊がやってきて彼の隣に座ったのだ。彼女の顔は改めて自然の広大さに接してか、そこはかとなく落ち着き払っている。

「時が過ぎるなあ……って思ってた」

それを聞いた雁真は、ああ、とやや遅れて言葉の意味を理解した。菊は悠久の大空の中に瞳を浸し、時の流れを肌で感じていたのだ。

「うん、そうだな」

雁真が適当に返事すれば、この素っ気ないと言える態度に菊は僅かに眉を顰めた。

「お兄ちゃんたら、悠長なのね」

「俺達が年を取るのなんて、分かりきった事だからな」

それこそが天命であり、地上に住まう人々にはどうにもこうにも揺るがしのない定めだ。不老不死の薬を求めて旅に出たところで空しく、この世では人は年を経る事に甘んじなければなるまい。

菊は、それがよく分からない、不可解だ、と言わんばかりの様子で雁真の顔を覗き込んできた。

「お兄ちゃんは死ぬのが怖くないの？」

「さあ、どうだろう。余り考えた事ないなあ」

自分の死、については幾度も考えた事がある。だがそれ自体に直面した時の感覚、また感触が如何なるものであるか、そこまで神経質に憂慮、或いは期待したという記憶はない。

そもそも人は、死を迎えるのが普通である。善行を積みめば天国、悪逆を尽くせば地獄。そうやって古き時代の数多の前人達はこの世から絶え間無く消えていったのだ。それなのに死を恐れて、一体何が変わるというのだろう。否、変わる筈がない。

雁真は可笑しくなり、思わず笑みを零した。

「菊は怖いのか？」

「普通の人なら怖いよ」

暗に雁真は変だ、と言っている。彼は何か変なのかよく分からなかった。

「でも死なんてのは人には等しく訪れる、免れないものだぞ」

「でも、死んだらもう大切な人には会えなくなるんでしょう？」

不満と哀しみの入り混じった顔を向けられ、雁真はきょとんとし、しかし臆て苦笑する。

「その人との今生の縁さえ良ければ、きっと次の世でも一緒にになれるさ」

菊は目を丸くする。

「じゃあ、父様や母様とまた一緒にになれるかな」

「菊……」

「え？」

雁真は、呆然として菊を暫く見詰めていた。だが直ぐさま視線を離し、再び彼女の方を向いてそっと笑った。

「一緒にになれるよ、絆さえあれば。うん、絆は大切だ」

雁真は、丸で父親のそれでもあるかのように菊の頭を愛撫した。

「菊は良い娘だから、きつと神様もお前の望むままにしてくれる」

「そうだいいな」

菊は頬を薄く染め、柔らかく笑った。

幾分か大人びてはきたものの、未だ幼さを残すこの妹がもう結婚するのか――と、雁真は何とも不思議な思いだった。彼ですら未だ経験のない事である。

菊は女だからまだ良かった。だが男である雁真の場合は、ある程度の稼ぎの余裕でもない限り、とてもではないが嫁は貰えない。運がなければ、生涯独り身も有り得る。しかし兎にも角にも、菊は幸せになれそうだ。雁真は顔に喜悦の色を浮かべ、口を動かしていた。

「棚から牡丹餅、だな」

「え？」

菊は目を丸くし、小首を傾げる。

「何？」

「ただ、幸せでさ」

雁真は、妹に優しく微笑んだ。菊もそれに満足したように、微笑み返した。

「うん」

雁真は天を仰ぎ、先程の菊と同じように悠久の流れの随まにまに心を委ねた。時は流れ、時代は移ろう。人の姿は変わってゆき、いずれは誰もが平等に死を迎える。そして新たな命が産声を上げ、人は絶え間無く続いてゆく。いつか雁真という一人の人間の命が終わりを迎えても、人という存在はこの流れと共に永劫に在り続けるのだろう。菊も雁真に釣られるように再び空を仰ぎ見て、その中に世の無窮を感じ取った。

「お兄ちゃん」

菊は、雁真の地面につけて草に埋もれた掌の上に彼女の手をそつと重ねる。そして身を寄せ、彼に顔を近づけてきた。

「ん？」

雁真が横に顔を向ければ、直ぐ至近には鈴を張ったような大きな瞳の、僅かに揺れる様があった。何かを躊躇するかのような、そんな色の出た顔だ。

「菊？」

雁真が不思議に思つて彼女の名を呼ぶと、菊ははつとしたように目を見開く。臆て淡く笑い、首を横に振った。その仕種がどこか哀しげに見えたのは、気のせいだろうか。

「ううん、何でもない。何でもないよ。御免なさい。ただね……お兄ちゃんの顔を見ていたら、どんなに哀しくて辛い事があっても、救われる気がして」

菊の頬が、ほんのりと赤く染まった。

「菊……」

流石にそこまで言われると、雁真も照れ臭くなってくる。しかし極力感情を表に出さないように努めた。

「俺はそんなに、大層な人間じゃないのに」

菊はこんなにも深く雁真を慕っている。果たして、例の結婚の話を切り出したなら、彼女はどんな反応を彼に見せるのだろうか。

花よ、不変であれ。常盤ときわに純美たれ。

美しく、儚げな少女のような響き。

消えては現れ、また消える。

彼はこの脆く壊れやすい花を幾度も抱いては幾度も散らす。そのような幻が時折彼の元に夢となっては訪れ、はた礎と思いついたようにまた消えゆく。それは何時しか彼の胸の中に美しく、強かに生きていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7841y/>

修羅の一族・咎人語り

2011年11月27日16時51分発行